

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、頻出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜 総目次及び作品図版』（中央公論美術出版 2008年）
→『創作版画誌の系譜』
- 7、執筆者

岩切信一郎（元新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）	西山純子（千葉市美術館学芸員）
三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）	森 登（学藝書院）
樋口良一（版画堂）	

戦前に版画を制作した作家たち (23)

【み・前半】

三浦 曉 (みうら・あきら)

青森県の版画教育は1927年4月に、画家・版画家の今純三が青森県師範学校図画科嘱託になることに始まる。『青森県版画教育覚え書』には「今純三の指導を受け、影響を受けていた川崎正人、三浦曉、…先達あったのこと」とあり、三浦は青森県師範学校で教師への教育を受けたものと考えられる。1930年当時、三浦は青森県西郡向陽小学校に勤務しており、同僚の川崎正人と「西郡図画教育研究会」の発起人となり、創設に尽力する。1932年11月13日には同会の主催で講師として今純三を招き、版画講習会(向陽小学校)を開催。また1934年には同会主催で「図画科教授法研究会」を、1938年には西田武雄・武藤完一・小野忠重を講師に招いて同会主催「版画講習会」(木造中学校図画教室 1938.8.4~5)を開催した。三浦も参加し、その時の作品と見られる風景を描いた銅版画が、西田主宰日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第71号(1938.9)に掲載されている。1931年から東奥日報社主催「東奥美術展」が始まるが、三浦はその第3回展(1933.10.14~17 青森市公会堂ほか)の洋画部門に《深浦風景》《種子を蒔く頃》、第4回展(1934.10.14~17 青森市公会堂ほか)に《夏の風景》《昼の海》《海》、第5回展(1935.10.17~20 青森市公会堂ほか)に《風景》を出品している。これらの作品は油彩画か版画かは不明。【文献】『東奥年鑑』昭和9年版・昭和10年版・昭和11年版(東奥日報社 1934~1936)／江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979)／『エッチング』70・71(加治)

三浦治郎 (みうら・じろう)

大分県師範学校において同校の図画教師武藤完一は、1931年の夏休みに中島重太郎の創作版画倶楽部主催で、大分で最初の創作版画講習会(講師:平塚運一 1931.8.3~7 参加者29名)を開催。武藤はその講習会を機に版画同人誌『彫りと摺り』(1931~1933)を創刊する。三浦は講習会に参加し、同誌第1号(1931.9)に《七面鳥》を発表。【文献】「創作版画講習会」『郷土図画』1-5(大分美育研究会 1931.10)／池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002.9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

三浦第朔 (みうら・だいさく)

1926(大正15)年澤田伊四郎・更科源蔵・谷内一郎・深澤索一と共に詩と版画的同人誌『港』を創刊。第1輯(1926.12)の木版表紙絵(彫は深澤)を描き、「朝、秋の心、真黒い海」(詩)と「詩と絵の心」を発表。続く第2輯(1927.2)に「無題、高麗青磁、娘乞食に寄す、風、夕べ、月光、霜、雨」(詩)、第3輯(1927.3)に「ひとつの喜び、自然の諧音、竹」(詩)と「セザンヌ(1)」を発表するも退会。1927年7月には、更科が釧路で創刊した詩誌『港街』に参加した。その後、1928年の第6回春陽会展に油彩画《静物》、翌1929年の第9回日本創作版画協会展に木版画《風景》を出品している。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『創作版画誌の系譜』(三木)

三浦長五郎 (みうら・ちょうごろう)

青森県南津軽郡黒石町において安藝蜻一は「黒石創作版画協会」を立ち上げ、版画同人誌『はなが』を発行する。現在、創刊号は確認されておらず、第2号は1933年2月の発行である。三浦はその第2号に《冬》と目次には「未定」として男の肖像を発表している。第3号は3月に発行されたが作品は未発表である。その後、安藝は同1933年に版画同人誌『版画精神』を発行するが、創刊号は未見。三浦はその第2号(1933.6)に《男に扮せる老婆》《芝居見る女》《労苦》の3点を発表。同年10月に開催された第3回東奥美術展(1933.10.14~17 青森市公会堂)へは一般展洋画部門に《休憩》を出品し、特選を受賞している。【文献】『はなが』2・3／『東奥年鑑』昭和9年版(東奥日報社 1934)／『緑の樹の下の夢—青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001)／『創作版画誌の系譜』(加治)

三浦正義 (みうら・まさよし)

1931年、講師に平塚運一が招かれて、大分での初めての版画講習会(8.3~7 創作版画倶楽部主催)が大分県師範学校で開催された。開催を記念して同校の武藤完一はこの講習会を機に版画同人誌『彫りと摺り』(1931~1933 全8号)を創刊。三浦はその第3号(1932.1)賀状号に《勅題》、第6号(1932.12)に《別府棧橋》、第7号(1933.3)に《大分城》を発表。《別府棧橋》の作者言には「別府の棧橋と汽船の感じをねらったものです。又秋の外光も出し度いと思ひました」と記されていて、作品は光と影を意識したものとなっている。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002.9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

三浦瑠観 (みうら・りゅうかん)

1923(大正12)年日本画家吉川観方らと京都で「洛陽版画協会」を結成し、職人との協働による版画を制作。なお、当時の他の記録に「三浦瑠観」の名は見出せないが、名前のよく似た人物に「三浦理観」がいる。同一人かどうかは不明であるが、参考までにその経歴を記すと、1895(明治28)年愛知県幡豆郡横須賀村の生まれ。西山翠嶂の「青甲社」に学び、1921年第3回帝展に日本画《残照》が入選。1923年京都市立絵画専門学校を卒業し、研究科に進む。その後の活動は不明だが、1971年頃は京都市に住んでいる。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12(1984)／〔三浦理観〕服部徳次郎『愛知画家名鑑』(愛知画家顕彰会 1997)／『同窓生名簿 明治13~昭和46』(京都市立芸術大学美術学部同窓会 1971)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)(三木)

三重野 忞 (みえの・さから)

1931年夏に大分県師範学校で開催された版画教育講習会(講師:平塚運一 8.3~7)に参加し、《蘇》(単色木版)を制作。主宰者の武藤完一がこの講習会を機に創刊した版画誌『彫りと摺り』(1931~1933 全8冊)の創刊号(1931.9)に同作品が掲載されている。【文献】「創作版画講習会」『郷土図画』1-5(大分美育研究会 1931.10)／『創作版画誌の系譜』(樋口)

三重野友美 (みえの・ともみ)

1931年、講師に平塚運一が招かれて、大分での初めて

の版画講習会(8.3~7 創作版画倶楽部主催)が大分県師範学校で開催された。開催を記念して同校の武藤完一は版画誌『彫りと摺り』(1931~1933 全8号)を創刊。三重野はその第8号(1933.6)に『天草灘』を発表。「これは五月の旅行中に得た印象です。前の波や雲の位置が気になりますが…」と作者言に記している。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1(2002.9)／『創作版画誌の系譜』(加治)

三上青枝(みかみ・せいし)

俳誌『ムサ、ビ』第7巻第9号(1934.9)の表紙絵を担当、木版画《習作》を制作。【文献】『ムサ、ビ』7-9(樋口)

三上知治(みかみ・ともはる) 1886~1974

1886(明治19)年12月10日東京に生まれる。1902年9月小山正太郎の不同舎に入塾、その後太平洋画会研究所で学ぶ。1907年第1回文展に《松並木》を出品。翌年太平洋画会会員となるが、第2回以降の文展および帝展に出品し続け、1928年第10回帝展で《護羊犬》が特選となり、1930年無鑑査に推薦される。1924年から25年にかけてヨーロッパに遊学、フランス・イタリアに滞在する。1936年海軍館陳列画家の一人に選ばれ《蘇州空中戦の図》を制作する。1938年海軍従軍画家として中国に赴き、1943年《マライ沖海戦》《アリューシャン上陸の図》等の多数の戦争画やスケッチを制作している。その間太平洋美術学校で後身の指導にもあたっている。戦後は1947年に「示現会」を結成し代表となる。日展審査員をつとめ、日本水彩画会名誉会員でもあった。版画・挿絵に関しては、不同舎・太平洋画会との関係からか、『遊楽雑誌』(近事画報社 1906)に庄野宗之助と共に挿絵を手がけており、『方寸』第1巻6号(1907.11)に《紅葉狩》(ジंक版)、第2巻7号(1908.10)に《画学》(石版)や『ホトトギス』の表紙絵《竹煮草》や表紙裏に《解脫》(1914)等が掲載されている。また1936年太平洋画会内に設けられた「日本新版画協会」(石川寅治・吉田博ら10作家)が刊行した『新時代版画集 前輯』に《護羊犬》が多色木版で複製されている。著書には近藤浩一路や前川千帆・岡本一平らと共に「漫画双紙」の一冊として随筆と漫画が見開頁になった『七いる唐辛』(磯部甲陽堂 1919)が刊行されている。1921年前後から晩年まで太平洋画会研究所の師であった満谷国四郎の下落合の西隣りに住居し、1974(昭和49)年6月3日東京で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和49・50年版(東京国立文化財研究所 1976)／『20世紀物故洋画家事典』(美術年鑑社 1997)／『日本の版画IV 1931-1940』展図録(千葉市美術館 2004)／『創作版画誌の系譜』(森)

三木凱歌(みき・いさむ) 1904~1985

1904(明治37)年9月25日和歌山県和歌山市に生まれる。1922年県立和歌山中学校を卒業。1925年にあったカナ文字書体の懸賞募集により「カナモジカイ」の存在を知り、同年入会。翌1926年東京美術学校彫刻科塑造部に入。建畠大夢に学ぶ。在学中、1929年の第10回帝展に彫刻が初入選。翌年の第2回聖徳太子奉讃展、第11回帝展にも入選した。また、校友会版画部に所属し、1928年の第3回椎の樹版画部展(6.15~16 同校講堂廊下)、1930年の版画展(11.28~29 同校)などに出品している。1931年彫刻科塑造部本科を卒業。卒業後は、「カナモジカイ」で視覚障害者対象のカナ文字タイプライターの研究開発

などに従事しながら、彫刻の制作を続け、1932年の第7回国画会展の他は、帝展の第12~15回展・無鑑査展(1931~1934・1936)、新文展の第2・4・6回・戦時展(1938・1941・1943・1944)、紀元2600年奉祝展(1940)などに出品し、官展系彫刻家の道を歩んだ。また、1940年に恩師の大夢門下で結成された「直土会」の会員になっている。戦後は、1946年に凸版印刷株式会社に入社。板橋工場のベントン彫刻部に所属し、1959年の定年まで勤務。その間、日展の第3~5回展(1947~1949)、第11~13回展(1955~1957)などに出品。一方で、活字設計を手がけ、1949年に片仮名書体「アラタ」を発表した。退職後も書体設計者として片仮名・平仮名の金属活字書体、タイプライター用書体の開発・設計などに尽力するとともに、「財団法人カナモジカイ」の理事なども務めている。1985(昭和60)年7月13日東京都で逝去。【文献】伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』展図録(和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』(ぎょうせい 1997)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／「原字制作者プロフィール:ミキ イサム 1904-1985年」『アラタ 1209』リーフレット(朗文堂 アダナ・プレス倶楽部 2008)(三木)

三木翠山(みき・すいざん) 1887~1957

1887(明治20)年7月15日兵庫県に生まれる。本名齋一郎。竹内栖鳳門下、竹枝会で新時代の日本画をめざし研鑽に励む。1913年の文展(第7回)で《朝顔》が初入選し、以来、文展では毎回入選をはたす。東京の渡辺版画店主・渡辺庄三郎提唱の浮世絵版画復興運動の影響を受けて版画制作に取り組む。それは、関東大震災で被災し、上方へ働きに来ていた彫摺職人たちからも浮世絵版画復興の話聞き、京都でも伝統木版技術での新たな版画制作を起こしたいと動いたのが、版元・佐藤章太郎(京都市縄手大和橋上ル)であり、「現代の風景風俗を後世に伝え」、「わが国独特の木版画芸術の復興」をめざし、吉川観方と三木翠山に話をむけたのであった。「三木翠山創作版画」は、京風俗を描く美人版画で1924年に、『新選京都名所第一集』(堅版絵シリーズ6点—《東山の雪》《大堰川の花見船》《都踊の点茶》《大文字の夜の木屋町》《二條城の月》《清水詣》)がまず発行された。さらに翌1925年には『新選京都名所第二集』(横版横絵シリーズ6点—《春の嵐山》《春の夜の清水》《初夏の保津川》《賀茂川の夕立》《通天橋の秋》《金閣寺の雪》)が刊行された。ともに「摺刷式百枚絶版」で「京都市縄手通弁財天町・佐藤章太郎商店」から刊行。風景と妖艶な舞妓姿絵で京のデロリの美を表現し個性的であった。その後は、公募展出品画制作に邁進し、1932年には帝展推薦。1937年からの新文展は無鑑査出品となる。戦後は、日展でも活動するなど日本画家として主力を注いだ。1957(昭和32)年3月25日京都で逝去。【文献】『20世紀物故日本画家事典』(美術年鑑社 1998)／『三木翠山展』図録(姫路市立美術館 2015)(岩切)

三木辰夫(みき・たつお) 1904~1987

1904(明治37)年5月20日東京に生まれる。1923年東京美術学校西洋画科に入学。岡田三郎助に学ぶ。1928年同校を卒業。同年の第9回帝展に油彩画《入り日》が

入選した。1930年渡英。ロンドン大学のスレード・アートスクールに3年間通いエッチングを学ぶ。またこの間、ロンドン市立セントラル・アートスクールの夜学にも2年間通い、ここでもエッチングを学んだ。1933年帰国。滞欧洋画展(9.15～20 日本橋・三越)を開催し、油彩画と銅版画を出品。翌1934年には第21回光風会展に銅版画《六郷川のはげうり》《ワーリックの村》が入選。またこの年か、第一美術協会の会友に推挙され、会員・会友による洋画小品展(4.23～27 日本橋・三越)に出品。なお、同展へはその後出品し、第12回展(1940)からは会員として出品。1943年には事務所を引き受け、第16回展(1944)まで出品している。さらに、「三春会」(1928年の東京美術学校洋画科卒業生で結成)の会員となり、同年の第1回展に油彩画と銅版画《金をかけるオランダ人》などを出品。その後も第8回展(1941)まで出品したようである。1935年第1回第二部会展に銅版画《公園の朝》が入選。1937年個展(5.13～17 銀座・青樹社)を開催し、銅版画《ブルージュの或る寺》《ギャンプリング》《ミルヒル》など37点・水彩画3点・鉛筆画1点・油彩画10点を出品。1939年には橋口康雄・染木照と版画三人展(5.6～8 銀座・日動画廊)を開催し、銅版画《建築場》などを出品した。この年の12月、文部省航海練習所の練習船「日本丸」に乗り、翌年2月までテナンなど南洋群島を巡ったが、帰国後に練習船「日本丸」「海王丸」に乗船してミクロネシアなどを巡行した北川民次・松下義晴ら6名と「七洋美術会」(事務所：三木方)を結成し、展覧会(5.7～12 新宿・三越)を開催。同年の第4回海洋美術展にも出品した。翌1941年「南洋美術協会」に参加。第1回展に《緑蔭》、第2回展(1942)に《内南洋風景》(絵葉書による)などを出品。1942年には「新版画会」(1940結成)に参加し、〔大阪〕展(1.11～17 大阪・阪急)に銅版画《連峰の雲》など5点を出品。同年の第3回展(11.11～13 銀座・資生堂)にも出品した。1943年の「日本版画奉公会」結成に際しては理事となり、この年東京帝室博物館が銅版画20点を収蔵。1944年には銅版画による個展(1.19～22 丸の内・帝劇画廊)を開催し、《碇泊灯》《老人像》《農馬》《春の隅田川》などを出品した。戦後は、1945年に日本交通公社へ嘱託として勤務。第一美術協会は1946年に再開されたが、1947年に退会。1960年には「日版会」に参加している。1987(昭和62)年5月15日東京都で逝去。【文献】『今純三・和次郎とエッチング作家協会 採集する風景／銅版画と考現学の出会』展図録(渋谷区立松濤美術館 2001)／『美術家たちの「南洋群島」展』図録(町田市立国際版画美術館他 2008)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三卷』(ぎょうせい 1997)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『日版会略史』『第3回日版会展』出品目録(1962)／『第一美術協会第五回洋画小品展覧会』目録(1934)／『第一美術協会略史』『40周年記念第一展出品目録 会員名簿』(1969)／『エッチング』39・41～43・55(三木)

三岸好太郎(みぎし・こうたろう) 1903～1934

大正から昭和初期にかけて活躍した代表的な前衛派の洋画家である。1903(明治36)年4月18日北海道札幌に生まれる。1915年北海道庁立札幌第一中学校に入学。在学中に油絵に興味を持ち、1920年札幌で開かれた公募展「北斗雅会美術展」に出品。1921年同校を卒業し、画家を

目指して上京。1922年第3回中央美術展に入選。翌1923年の第1回春陽会展にも入選し、第2回展(1924)で春陽会賞を首席で受賞した。1924年吉田節子と結婚。その後も春陽会展へ出品を続け、1926年無鑑査となる。同年、上海・蘇州・杭州などを旅行。1930年には「独立美術協会」の結成に参加したが、最年少の会員であった。初期のアンリー・ルソー風、岸田劉生風の絵から始まって、フォービズム、キュービズム、構成主義、シュールレアリスムと画風を変えながら独自の絵画世界を追求したが、1934(昭和9)年7月1日旅行先の名古屋で逝去した。

版画は、1932年の独立美術協会第2回秋季展(10.2～9 有楽町・東京朝日新聞社)に石版画《女の顔》《道化〔別名：道化の首〕》《少女》を出品したが、これらの作品は、札幌で「北海石版所」を営む友人本間紹夫の協力で制作したものであった。他の作品としては、『北海道立三岸好太郎美術館所蔵品目録 1993』に、「版画」としてモノタイプの《風景》(1924頃)、木版画《籠を持つ少女》(1924頃)《姑娘二人》《姑娘》2点(各1926)、筆彩素描集『蝶と貝殻』(凸版墨刷の印刷に水彩・グワッシュによる手彩色 100部限定 1934)が収録され、「資料」として木版画《女の顔》(年代不詳)、リトグラフ《時計台》(原版のジंक版のみ 1932)が収録されている。また、「資料」に分類されているものうち、版による表紙装画のある『丹羽秀雄・吉田節子・三岸好太郎展覧会目録』(1925)『故侯野第四郎遺作展覧会目録』(1927)、木版を使った装幀本『仕立屋銀次』(本田一郎著 塩川書房 1930)『笹川の茂蔵』(子母澤寛著 塩川書房 1930)も広い意味で三岸の版の仕事と考えて良いだろう。さらに『日経アート』1999年2月号に図版が収録されているモノタイプの《踏切番》(1923.12.12作)、「日本の版画Ⅲ 1921～1930 都市と女と光と影と」展(千葉市美術館他 2001～2002)に出品された《森川喜助蔵書票》(木版 1930頃 森川は大阪の美術商)などを加えることができる。【文献】『北海道立三岸好太郎美術館所蔵品目録 1993』(北海道立三岸好太郎美術館 1993)／『生誕100年記念 三岸好太郎展』図録(北海道立三岸好太郎美術館他 2003)／「特集：版画がほしい」『日経アート』124(1999.2)／『日本の版画Ⅲ 1921～1930 都市と女と光と影と』展図録(千葉市美術館他 2001)(三木)

右田年英(みぎた・としひで) 1863～1925

文久3(1863)年6月17日大分県北海郡臼杵町(現・臼杵市)に生れる。本名豊彦。弟の寅彦(のぶひこ)はのちの劇作家。「年英」「梧齋」あるいは「晩翠樓」「一穎齋」等の号を用いた。1876(明治9)年に上京し洋画の国沢新九郎に学ぶが、師の国沢没後は本多錦吉郎に学ぶ。1884年には月岡芳年入門し浮世絵系絵画を学ぶ。師芳年の画風に忠実で、武者絵を得意とした。1891年の日本青年絵画協会結成に参加。1892年の日本青年絵画協会第1回絵画共進会では審査員に推挙され、同協会展に出品。また烏合会(浮世絵系若手画家たちの研究団体)展覧会にも出品。東京朝日新聞社に入社し、明治から大正の『朝日新聞』の挿絵、とくに連載小説の挿絵を専門に描いた。明治錦絵の制作は、シリーズとして、武者姿絵『英雄三十六歌選』(大判錦絵36枚、1893、佐々木豊吉版)、九代目団十郎の役者姿絵『三升合姿』(大判錦絵36枚、1893～94、佐々木豊吉版)、『名誉十八番』(大判錦絵18枚、1893、滑稽堂秋山武右衛門版)、『美人十二姿』(大判錦絵12枚、1901、滑稽堂秋山武右衛門版)が知られる。また、

三枚続絵も、歴史画ものをはじめ、日清戦争及び日露戦争にちなむ戦争版画の作例もある。また、1921年には伝統木版技術保存活動として自ら「年英随筆刊行会」を起こし『年英随筆』シリーズの出版をはじめたが思うようにいかず9枚程度で終わったとみられる。門下に鱈崎英朋・河合英忠・笹井英昭・伊東英泰・柚木英尚・天野英雅・福手英宜・武石英郷・松下英業・山川英茂・大野英起・山本英春・都賀英寛・渡辺英素・山田英辰・寺田英光などがいる。1925(大正14)年2月4日東京雑司ヶ谷で逝去。【文献】松本品子『挿絵画家英朋 鱈崎英朋伝』(スカイドア 2001)(岩切)

御厨善郎(みくりや・よしろう)

1924(大正13)年に銅版画家・高羽敏(本名貞敏)が兄・貞夫と共に大阪で発行した歌と版画の雑誌『同心草』(同心草舎 代道夏二編集兼発行者 大阪市住吉区天王寺町621〔その後は同市西成区粉濱本町2丁目38、更に同区粉濱東ノ町80等へ転住) 高羽貞夫内 1924.5～1938.11まで21冊確認 「代道夏二」は「高羽貞夫」の別名と思われる)の第13号(1927.9)に木版画《風景》を制作しているが、経歴は不明。なお、『同心草』第16号(1930.12)の「同心草」欄によれば、これまで同誌に掲載されてきた版画は「無造作に活版で印刷されることや寸法の大きさに對する不満、その他色んな物足りなさ」から、手摺の版画誌『BLACK』を刊行することになり、第1号(高羽敏《兵舎風景》、吉川長次《公園風景》、片岡重治《風景習作》)、第2号(片岡重治《あざみ》、吉川長次《都会風景》、高羽敏《女》)が既刊されたとある。第17号(1933.6)以降、『同心草』に版画の掲載はなく、詩と短歌のみとなる。【文献】『同心草』7・8・11～13・16～21(樋口)

三澤 龍(みさわ・たつ)

長野県安曇郡の小学校教師たちは、版画家として活躍していた郷里の先輩教師武田新太郎を顧問に迎えて黄樹社を組織し、版画誌『黄樹』(1937～1938 全2号)を発行した。三澤は会員名簿に記載されているものの、版画の発表はない。当時は北安曇郡松川小学校に勤務していた。【文献】『黄樹』1(加治)

三澤 弘(みさわ・ひろし)

1929年5月に川西英・北村今三らは神戸で創作版画グループ「三紅会」を結成し、版画展覧会(第6回まで)開催などの活動を行った。1935年7月に「三紅会」は神戸そごう百貨店6階講習室において19～21日の3日間、版画講習会(講師:三紅会会員6名 参加者5名)を開催した。19日はエッチング、20日は木版単色、21日は木版多色摺の日程で行われ、三澤も参加。西田武雄主宰日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第34号(1935.8)には、講習会作品の街を描いた銅版画が掲載されている。講習会記念写真では詰襟服を着用の三澤が写っていることから、当時は学生であったと思われる。【文献】『エッチング』34(加治)

三澤 操(みさわ・みさお)

西田武雄主宰日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第15号(1934.1)に三澤の銅版画《自画像》が掲載されている。西田は「三澤氏の自画像よく似ている。手の表現が少し弱かった。」と「作品評」にコメントを記している。当時、三澤は大森の独逸学校教師をしており、

研究所製エッチングプレス機を購入(『エッチング』12 1933.10)し、銅版画を制作していた。そのことについて「研究所通信」では「三澤操先生は、友人の結婚式用として食卓のメニューをエッチングで二十五枚ばかり刷られた。面白い思ひつきである」と紹介している。【文献】『エッチング』12・15(加治)

三島蕉窓(みしま・しょうそう) 1852～1914

嘉永5(1852)年6月15日江戸の神田多町に生まれる。本名は雄之助。慶応2(1866)年に菊池容齋に入門し次第に頭角を現す。1884(明治17)年の第2回内国勸業博覧会に《人物》《花鳥》で入選。翌年鑑画会第1回大会に《遊女》《鶯》など出品しフェノロサに注目され、1886年の第2回鑑画会大会に《子母龍》で賞状を受けた。松本楓湖・渡辺省亭と共に菊池容齋門下の逸材とされた。松本楓湖編『日本歴史画報』(のち改題の『国史画報』 大倉書店1892)は木版整版による優秀な歴史画選である。画者は菊池容齋門下生たちによって構成され蕉窓も選抜され第一巻に《弘計王舞を為す図》、第七巻に《藤原長方遷都の非を論ずる図》を描いている。また『文芸倶楽部』口絵では、1895年の1巻10編「女房殺し」、1896年の2巻3編「悪因縁」、2巻6編「われから」、2巻11編「美人蜃気楼の図」、2巻14編「雙々綺語図」、2巻15編「変目傳」と、その初期の時代、美人人物画での活躍が知られる。明治期後年に入ると、次第に公募展への出品を嫌い、肉筆よりも挿絵・口絵の分野で活動。旅を愛し、晩年は南画に惹かれた。大野静方著『浮世絵と版画』(大東出版社1942)では「渡辺省亭と共に菊池容齋門下に出藍の誉あり、人物及花鳥画に長ず、亦小説口絵等の版画を多く描けり」と評している。1914(大正3)年東京下谷車坂町で逝去。【文献】「作家評伝略歴」『日本美術院百年史』1上(日本美術院 1989)(岩切)

三島利正(みしま・としまさ)

西田武雄主宰日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第11号(1933.9)に銅版画《高雄港》が掲載されていて、「作品評」で西田は「三島先生の高雄港は地方色が出ているし描き方も本格」と評している。1933年当時、三島は台南の寶公学校(小学校)に教師として勤務していたが、その後東京高等師範学校図画手工専修科に入学し、1937年3月に卒業。4月からは台湾州立新竹高等女学校の図画教師として赴任し、1941年3月まで勤務する。その後4月からは東京高等師範学校附属中学校の図画教師となり、戦後は引き続き東京教育大学附属高等学校の教諭から、東京教育大学助教授、教授となった。「高等学校の美術教育」(『教育大学講座』第25巻 1951)など色彩教育、高校の美術教育に関する執筆多数あり。【文献】『エッチング』11/金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書 第1・2部』(金子一夫 2016)(加治)

水井政之助(みずい・まさのすけ)

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)では、1940年当時、廃刊となっていた同校生徒発行の版画同人誌『刀』(1928～1932 全13号)を再刊しようと5年生の加地春彦・小松行高らが中心となって版画同人誌『刀 再版』(1940～1941 全5号)を創刊する。3年生の水井も参加し、第2号(1940.10)に《風景》、第3号(1941)に《議事堂》を、4年生に進

級後の第4号(1941)には《滝》を発表した。その後『刀再版』の刊行は第5号で途絶えてしまう。【文献】『創作版画の川上澄生』展図録(鹿沼市立川上澄生美術館 2002)／『創作版画誌の系譜』(加治)

水内平一郎(杏平)(みずうち・へいいちろう／きょうへい) 1909～2001

1909(明治42)年3月18日京都市に生まれる。雅号は中平之助。戦後は水内杏平の名で作品を発表する漆芸作家。版画制作には1933年まで本名の水内平一郎を、1934年からは中平之助を使用。1926年京都市立美術工芸学校漆工科を卒業し、蒔絵を迎田秋悦に、洋画デッサンを鹿子木孟郎に師事する。1935年から京都市美術館展(1935～1944)を中心に帝展・日展などの漆工芸部門に、戦後は主に京展・日展に出品し、1970年からは新匠工芸展に所属して会員となる。この間、1946年から母校(現・日吉ヶ丘高校)の漆芸科教諭を、1979年からは帝塚山短期大学の講師を務め、1986年に退職。京都工芸美術作家協会理事長に就任し、のちに顧問となる。1983年に京都府文化賞功労賞、2000年には日本漆工協会の漆工功労賞を受賞。著書には『茶の漆器』(淡交社 1981)『漆庵空語』(光琳社 1987)などがある。1993年、姫路市にある圓山記念日本工芸美術館で特別展「水内杏平の世界」が開催された。2001(平成13)年5月13日肺がんのため京都市の病院で逝去。

版画制作については、1933年に東京の料治熊太が主宰した版画同人誌『白と黒』の同人となり、第36号(1933.6)に《草》を発表したのを始めとして、第37～40・42号(1933.7～12)まで、並行して同じ料治の機械刷り版画同人誌『版芸術』第18・20・21号(1933.9～12)にも水内平一郎の名で木版画を発表。1934年に入り『白と黒』第43・46・48号(1934.1～6)及び『版芸術』第22・23・26号(1934.1～5)では中平之助の名で木版画を発表。『白と黒』第43号の「あとがき」で料治は、水内平一郎の雅号が中平之助であると明らかにしている。また、京都の版画同人誌『大衆版画』(1931 全2号)を主宰した徳力富吉郎が刊行した版画集『版 小品集』(丹祿会 刊行年不明)には水内平一郎の名で山と民家を描いた木版画を発表している。『白と黒』『版芸術』の1933年までは水内平一郎で版画を発表しているところから『版 小品集』は1933年12月以前に出版されたと推測される。また徳力が「作者は主として私が指導して居る人々でいづれおとらぬ版画愛好者達です」と「序にかえて」に書いており、水内自身でも「その頃たまたま手にした数冊の初期の創作版画集が私の興味をひき、漆芸制作の余暇にデッサンを基本にして自分なりの技法で木版画を始めたが、これによって表現についての私なりの理解を得ることが出来た」としていることから、「数冊の初期の創作版画集」とは『白と黒』(1930～1934 全50号)や『版芸術』(1932～1936 全58号)であり、最初に発表した1933年頃に版画をはじめたものと考えられる。また「これらが自分の制作(漆工芸)の原点になっている」とも回想していて『水内杏平作品集』(京都書院 1994)には《煙突のある家》《踏切》など木版画12点も掲載されている。1997年には『年賀状版画集水内杏平と知友たち』が発行されているが未見。【文献】岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『資料館紀要』12(京都府立総合資料館 1984.3)／水内杏平「振り返れば」『水内杏平作品集』(京都書院 1994)／『水内杏平作品集 1994-2001』(水内義行 2003)／『創作版画誌の系譜』

／『美術家人名事典 工芸篇』(日外アソシエーツ 2010)(加治)

水落小石(みずおち・しょうせき)

石井柏亭・森田恒友・山本鼎の3人が創作版画の普及を目的に発行した美術文芸雑誌『方寸』(1907～1911 全35冊)の第4巻4号(1910.5)に石版の絵葉書《小供の画》を発表。【文献】『方寸』復刻版(三彩社 1973)(加治)

水上玄三(みずかみ・いぞう)

東京で発行された版画同人誌『爆竹』は第4～7号(1929～1930)が確認されている。創刊号が未確認のため、発刊の経緯は不明であるが、号を重ねるにつれプロレタリア美術の傾向を強めていく。その第6号(1930.3)に木版画《淡島》を発表するが、水上の作品からはその傾向は見受けられない。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

水上信雄(みずかみ・のぶお) 1904～1994

1904(明治37)年に生まれる。1927年、東京美術学校西洋画科を卒業。雅号は信雅。東京美術学校西洋画科卒業の東京市内小学校に勤務する教師たちで組織された「光言会」は、西田武雄主宰日本エッチング研究所においてエッチング講習会(1933.12.16 講師：西田武雄)を開催した。当時、光言会に所属していた水上もこの講習会に参加。この時制作した銅版画《肖像》が研究所機関誌『エッチング』第15号(1934.1)に掲載されている。西田の「作品評」には「水上先生の肖像は光言会講習の時の習作、モデル使用。なかなかいい味に出ています」と記されている。帝国美術院展第6回(1925)に洋画で入選し、その後は第9・13・14回に出品。新文展等にも出品する。光風会展には1936年から出品し、1938年には会員となり、戦後は洋画家として活躍。著作には『画の本』(小峰書店 1951)があり、相馬御風著『良寛さまのお話』(小峰書店 1950)に挿絵を描いている。1994(平成6)年6月8日逝去。1972年当時、東京都杉並区南荻窪3-4-18に在住。【文献】『エッチング』15／『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和47年版』(1972.12)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『光風会史 1912～2014』(光風会 2014)(加治)

水島爾保布(みずしま・におう) 1884～1958

1884(明治17)年12月8日東京根岸に生まれる。1908年、東京美術学校日本画科選科卒業。1912年、5月に創刊された文芸誌『モザイク』の同人となり、6月に「モザイク主催第1回展覧会」を開催。同年(大正元年)11月、同展とメンバーが多く重なる形で美校出身あるいは在学中の日本画家を中心とするグループ行樹社を結成、第1回展を開催した。1915年、親交のあった長谷川如是閑に招かれて大阪朝日新聞社に専属画家として入社。1918年白虹事件を機に如是閑らとともに退社、根岸に戻る。1920年第2回帝展に《阿修羅のをどり》で初入選。1925年の第6回展でも《彌次喜多》に入選。その間の1922年、第一作家同盟に参加してすぐに退会している。本画を手がける一方で東京漫画会に参加、辛辣かつユーモラスな漫画や漫文、随筆や小説で名をなし、また『赤い鳥』や『金の船／金の星』など児童雑誌の挿絵や童話も多く残している。戦前の本画はほとんど知られず、1919年に春陽堂

から刊行された谷崎潤一郎『人魚の嘆き・魔術師』の耽美な装幀挿画や、如是閑が創刊した雑誌『我等』での鋭く時世を切る随筆がその仕事を代表する。戦中に妻の郷里である新潟県の燕町に疎開、その後長岡市に移り、同地にて1958（昭和33）年12月30日逝去。長男はSF作家の今日泊亜蘭である。

画家として残した仕事には版によるものも多く、1910年に創刊された『新文芸』の表紙や挿画が早い例だろう。以来雑誌や書籍の装幀・挿画を夥しく手がけており、『芸美』第1年第2号（1914.6）に収められた《死の捷利より》のような創作版画と目される作品もある。なかでも他刻他摺ではあるが、『大阪朝日新聞』の連載をもとに金尾文淵堂から刊行された一連の木版画集や書籍の木版口絵・挿画が白眉といえる。列記すると1917年の『阪神名勝図絵』（画家は水島のほか幡恒春・永井瓢齋・野田九浦・赤松麟作、彫師は大倉半兵衛、摺師は西村熊吉）、同年のフレデリック・スタール著『山陽行脚 附東海道行脚』（画家は水島のほか岡本一平など）、1919年の同『御札行脚』（画家は水島のほか中澤弘光など）、1920年の水島著『東海道五十三次 附瀬戸内海』（摺師は西村熊吉）である。『阪神名勝図絵』は大阪朝日新聞社の専属画家および記者たちによる仕事であり、スタールもまた同社の嘱託社員であった。いずれにおいても水島は、多くは縦の判型に、風景を図案的・装飾的に描くモダンな構成を見せ、その特異なデザイン感覚に上質な彫りと摺りが融合して見事である。本人に版の絵という意識がどこまであったのかは定かでないが、漫画や挿絵、図案などの小世界で勝負する版下画工の仕事に、展覧会出品作と同等、あるいはそれ以上の創造性や重要性を認めていたことは、『東海道五十三次 附瀬戸内海』の「はしがき」や「漫畫漫録」（『水島爾保布集 見物左衛門』）などからも十分にうかがうことができる。【文献】水島爾保布「漫畫漫録」『水島爾保布集 見物左衛門』（現代ユウモア全集刊行会 1929）／『幻想文学』22（特集＝大正デカダンス—耽美と怪異 1988.4）／かわじもとたか『水島爾保布著作書誌・探索日誌』（杉並げやき出版 1999）／峯島正行『評伝・SFの先駆者 今日泊亜蘭』（青蛙房 2001）／『阪神名勝図絵～市外居住のすゝめ～』展図録（芦屋市立美術館博物館 2005）／桐原浩「水島爾保布とビアズリー 一行樹社展と『モザイク』を中心に」『新潟県立近代美術館研究紀要』16（2017.3）（西山）

水谷 功（みずたに・いさお）

出身地、生没年ともに不詳。守口基隆主宰の版画誌『ネヴェロン』第2号（ネヴェロン社 1928.8）に、構成主義への関心を示す多色摺木版画《建築的構成》を掲載する。他の版画誌掲載や展覧会出品は確認できない。【文献】『創作版画誌の系譜』（滝沢）

水野 勇（みずの・いさむ）

昭和初期の静岡では版画仲間が意気投合し、「童土社」を結成し、版画と文芸の同人誌『ゆうかり』（1931～1935 全30号）を発行する。その第24号（1934.12）に《鉄橋》、第25号（1935.2）に《スタンド》を発表。当時、静岡県静岡市水落町1-9に在住（『ゆうかり』26 1935.3）。【文献】『創作版画誌の系譜』（加治）

水野以文（みずの・いぶん）1890～1974

1890（明治23）年4月23日静岡県浜名郡豊西村に生まれる。本名準平。14歳の時に在郷の俳人・松島十湖の命

名により「以文」と号す。1907年丸山晚霞を頼って上京し、晚霞の紹介で日本橋の石版工場に勤めながら夜間、太平洋画会研究所、その後日本水彩画研究所に学ぶ。1909年第3回文展に水彩画《城邊河岸の一部》《晩夏》が入選。第4・5回（1910・11）にも水彩画が入選するほか、太平洋画会展でも第8回（1910）に《習作》ほか6点、第9回（1911）に《夏の午後》など3点、第10回（1912）に《久世山下より》など2点の水彩画と油彩画《椿咲く頃》が入選する。1913年石井柏亭・石川欽一郎・丸山晚霞らが結成した「日本水彩画会」に研究生だった水野も参加。以降一貫して日本水彩画会に出品を続ける傍ら、デザイナーを本業とし、戦前、森永のエンゼルマークや紙幣のデザインなどにも携わっていたようで、1926年凸版印刷の図案課長となり、1928年「大衆のための美術」を提唱して多田北鳥・大橋月皎ら図案家14名と印刷技術者19名によって結成された「実用版画美術協会」に名を連ねる。同協会は印刷図案における絵画性と印刷技術の結合を目指し、1929年12月の第1回展から1936年3月頃開催の「創作雛乃試作展」まで小規模展を含め合わせて16回の展覧会を開催するほか、小冊子『実用版画美術』の発行や広告美術の講習会、広告劇の上演などを実施していたようだが、版画に関わる水野の活動として知られるのはそれぐらいで、版画作品は実見できていない。戦後は、1951年日本水彩画会名誉会員に推され、日本水彩画会研究所指導員などを務める。1969年水彩画の普及やデザイナーとしての活動に対して紫綬褒章を受章する。1974（昭和49）年4月21日東京で逝去。【文献】『美術新論』5-1（美術新論社 1930.1）／『日本近代水彩画と水野以文』展図録（浜松市美術館 1993）／滝沢恭司「多田北鳥」『近代日本版画家名覧』13（『版画堂』目録113 2016.9）（樋口）

水野勝邦（みずの・かつくに）

1928（昭和3）年の第3回1930年協会展に油彩画《ガード》、翌1929年の第9回日本創作版画協会展に木版画《停車場》《熱海風景》を出品。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）（三木）

水野孤芳（みずの・こほう）1863～1928

1863（文久3）年9月24日に明石藩士の長男として江戸で生まれる。本多錦吉郎の画塾彰技堂で学んだ後、『絵入朝野新聞』に写真木版・写真銅版と称された挿絵を盛んに描いている。1887（明治20）年頃から《日本三景之内 安芸之宮島真景》（誠協堂版）、《日光神橋之図》（写真石版社）、《隅田川遊船之図》（熊沢版）等の石版画を、また1888年に刊行された末松謙澄訳『谷間の姫百合 二』（金港堂）の木口木版の挿図（森山天葩刀）6点を描いている。1880年の明治美術会第1回展に油絵《人物》を出品。1881年1月「美団社」を設立し美術雑誌『花籠』を刊行、石版を始め松崎真二のコロタイプ写真、島崎天民の木口木版、生巧館の木口木版、中川昇の布目応用銅版等を紹介している。3号以降の刊行は定かではないが、『花籠』は印刷美術雑誌の嚆矢ともいえる。同年、伊井蓉峰・千歳米坂等と共に済美館劇の旗揚げに参加し、以降画壇から離れ、俳優として活動。1893年には川上音二郎一座に加わり水野誉志美と称し、後に好美と称した。1928（昭和3）年3月24日東京で逝去。【文献】小野忠重『日本の石版画』（美術出版社 1967）／『描かれた明治ニッポン～石版画〔リトグラフ〕の時代』（同展実行委員会 2002）（森）

水野染二 (みずの・そめじ)

1930年代の静岡では『かけた壺』(1930～1935 全23号)、『ゆうかり』(1931～1935 全30号)といった版画同人誌が刊行されているが、同時期に浦田儀一、真澄忠夫らによって個性豊かな版画誌『版画座』(1932～1934全16号)も発行された。水野は創刊から参加し、第1号(1932.11)には《鶏》《壁画》、第2号(1932.12)に《髪》《をどり》、第3号(1933.1)に《朝海》年賀状《画状》、第4号(1933.2)に《風景》と表紙、第5号(1933.3)に《安部川風景》《椿》、第6号(1933.4)に《門出》、第7号(1933.5)に《狐ヶ崎風景》《風景》、第8号(1933.6)に《虞美人草》《ブランコ》、第9号(1933.7)に《虎(ハリコ製)》と発表を続けたが、その後の発表はない。当時、静岡市泉町3に在住。【文献】『版画座』5～8／『創作版画誌の系譜』(加治)

水野年方 (みずの・としかた) 1866～1908

慶応2(1866)年1月20日江戸、神田山本町に生れる。旧姓野中。本名条次郎。14歳の時に月岡芳年入門する。一時退塾し生活のために、鈴木鷲湖門下の山田柳塘に陶器絵付けを習って絵付け仕事に従事する。1882(明治15)年に再び芳年門に戻る。1885年からは師匠の芳年とともに『やまと新聞』の挿絵を担当。他に新聞附録の表紙絵、新聞や雑誌の挿絵を描き、同世代の尾形月耕と時代の代表的挿絵画家となる。勉強家で渡辺省亭や三島蕉窓と交流し本格的な花鳥画など日本画の指導を受ける。特に三島蕉窓とは密接で、年方の雅号「蕉雪」は「蕉窓」にちなむ号と推定される。1891年の富山県共進会に出品して2等賞。1892年には日本青年絵画協会の第1回絵画共進会での審査員に抜擢された。1895年5月に谷中清水町に移転。錦絵出版でも武勇譚(旧武者絵)の歴史画を描いたが、日本画でも歴史画を本格的に着手し、有職故実を学び、小堀鞆音との親交がはじまり、さらに技術と知識が進んだ。さらに、『文芸倶楽部』をはじめ単行本文芸口絵の現代風俗や美人画で名を馳せて、肉筆でも近代美人画の先駆けとなった。1898年日本絵画協会第5回出品「夕暮」で一等褒状。1900年第9回絵画共進会で銀牌受賞。第11回共進会では審査員として出品し銀牌受賞。1902年にも銀牌を受賞し、ますます展覧会出品作の制作、門下生への指導、口絵・挿絵の活動と、真面目な努力家で実直な性格は仕事過剰になり、そもそも体が弱かった面があったが、過労を増し体調不良に陥るのであった。挿絵類は新聞・雑誌だけでなく、修身教科書類の挿絵も多い。錦絵では、1884年頃から、大判三枚続絵に取り組み、特に歴史画の貢献が大である。同時代の高名な絵師6名での1888～1890年の『教導立志基』(松木平吉版)では15点を担当。日清戦争時には大判錦絵三枚続絵で最も多くを制作している。主な美人画シリーズでは、『三十六佳撰』(大判36枚、1893、秋山武右衛門版)、『茶の湯日々草』(横大判錦絵15枚、1896、秋山武右衛門)、『今様美人』(横大判錦絵12枚、1898、秋山武右衛門)、『三井好都の錦』(横大判錦絵12枚、1898、秋山武右衛門)がある。また、木版口絵も多く、『文芸倶楽部』をはじめ、雑誌以外の小説作品集の口絵も多く、斯界随一の数に及ぶものとみられる。1908(明治41)年4月7日東京帝国大学病院で急逝。鍋木清方をはじめ、荒井寛方・池田輝方・榊園(池田)蕉園等が代表的門下生であるが、十三回忌には神田明神境内に門下生一同によって顕彰碑「年方碑」の建碑が行われた。【文献】『作家評伝略歴』『日本美術院百年史』1上(日本美術院 1989)／岩切信一郎「水野年方とその

門下』『近代画説』9(明治美術学会 2000)(岩切)

水野 浩 (みずの・ひろし)

昭和初期の静岡では版画仲間が意気投合し、「童土社」を立ち上げ、版画と文芸の同人誌『ゆうかり』(1931～1935 全30号)を発行する。その第24号(1934.12)に《柿》、第25号(1935.2)に《獅子頭》を発表。当時、水野は静岡中学2年生。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

水野松次郎 (みずの・まつじろう)

下水内郡手工研究会は長野県下水内郡の小学校教師の集まりであり、版画誌『葵』(1934～1938 全5号)を発行する。その第1号(1934.9)に《ぐみ》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

水船六洲 (みずふね・ろくしゅう) 1912～1980

1912(明治45)年3月26日広島県呉市に生まれる。兄は洋画家水船三洋(1902～1945)。1940年に結婚し、田中姓となるも作品発表では「水船六洲」を使う。広島県立呉第二中学校を卒業し、1931年東京美術学校彫刻科塑造部に入學。彫刻を学ぶ一方、校友会版画部に入り版画を研究。1932年の第14回版画部展覧会(7.16～17 講堂前廊下)などに出品した。学外では、1932年に美術学校の武藤六郎・吉原正道・佐伯留守夫らが小野忠重らと結成した「新版画集団」に参加し、機関誌の『新版画』第3号(1932.8)に《女習作》を発表。その後は、1936年12月に解散するまで主力会員として活躍。『新版画』は、第5号(1932.10)を除き、第18号(1935.12)まで毎号に作品を発表。また、新版画集団展の第1回展(10.15～20 銀座・川島商店)に《林檎を持つ少女と鳥》など6点を出品したほか、第3回展(1933.11)を除き、第6回展(1936.10)までと、集団が主催した第1回アンデパンダン展(1934.6)、江戸東京風景版画展(1934.7)、小品展(1935.5)、現代版画展(1935.9)などにも積極的に出品した。公募展へは、1933年の第3回日本版画協会展に《町はずれ風景》、翌1934年の第12回春陽会展に《病院裏》が入選。さらに1935年の東京美術学校臨時版画研究室の開設に際しては、木版部を受講。平塚運一の指導を受け、同年の第4回日本版画協会展にも《外房風景一》《外房風景二》が入選している。1936年東京美術学校彫刻科塑造部を卒業。卒業後は横浜の関東学院中学部に勤務しながら、制作に励んだ。彫刻は、1936年の第11回国画会展・文展鑑査展、翌1937年の第12回国画会展に出品したが、以後は新文展の第1～5回展(1937～1942)・紀元2600年奉祝展(1940)・戦時特別展(1944)などに出品。その間、1941年の第4回新文展で特選を受賞するなど、官展系の彫刻家として着実に歩んだ。版画は、1936年の第11回国画会展に《泉庭》、第5回日本版画協会展に《卓上静物》《野菜図》《向日葵》を出品。同年12月に「新版画集団」は解散したが、翌1937年3月には小野らと「造型版画協会」を結成し、第1回展に《禽》《獸》《虫》《魚》を発表。第2回展(1938)からは公募展とし、戦前は1943年の第7回展まで作品を発表した。1943年日本版画奉公会会員。戦後は、1946年の第2回展から再び日展に彫刻を出品し、特選を受賞。続く第3回展(1947)と第6回展(1950)でも特選を受賞。第7回展(1951)では審査員を務め、その後も1960・1966・1970・1973年に審査員を務めた。1962年から日展評議員、1974年には理事となっている。またその間、1967年の第10回新日展に出品した

木彫《燭明り》で内閣総理大臣賞、1970年の第2回改組日展に出品した木彫《紡ぎ唄》で翌1971年に日本芸術院賞を受賞した。一方版画は、1949年に第8回造形〔型〕版画展（再開展 同人展）を開き、1954年の第12回展まで開催か。1959年には日本版画協会会員に推薦され、同年の第27回日本版画協会展に出品。以後、1980年の第48回展まで出品した。また、1952年の関東学院小学校設立と同時に主事となり、1960年から定年退職する1977年まで校長を務めている。1980（昭和55）年6月30日東京都杉並区の病院で逝去。【文献】「水船六洲」『日本美術年鑑』昭和56年版（東京国立文化財研究所 1983）／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第三巻』（ぎょうせい 1997）／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』（東京文化財研究所 2006）／加治幸子編「新版画集団展目録」『版ニュース』4別冊（1998 輝開）／加治幸子編「造型版画協会展覧会目録」『生誕100年 小野忠重展図録』（町田市立国際版画美術館 2009）／伊藤伸子「東京美術学校校友会版画部 1928-1933」『日本近代の青春 創作版画の名品』展図録（和歌山県立近代美術館・宇都宮美術館 2010）／『創作版画誌の系譜』（三木）

三角 泰（みすみ・ゆたか）1901～1940

1901（明治34）年1月29日熊本市新屋敷水道端（現・中央区新屋敷）に生まれる。1919年東京美術学校彫刻科塑像部に入学するがまもなく学校への熱意を失い、1923年友人と巣鴨で共同生活をはじめ、美術学校を中退した。1924年小笠原諸島母島を旅行するが、丹毒に侵されて現地で1年間絵を描きながら療養生活をおくる。1926年東京の吉祥寺にアトリエを建てて創作する。日本プロレタリア芸術連盟美術部（RA）を経て、1929年日本プロレタリア美術家同盟（PP）に加盟する。この年、長谷川昂の名で、第2回プロレタリア美術大展覧会に《習作（縛られた前衛）》（日本共産党蔵）などの彫刻作品を出品した。1930年第2回プロレタリア美術家同盟全国大会で鈴木賢二らと中央委員に選出される。東京支部の執行委員、書記長なども務めた。1932年7月、PP改称ヤップ組織部長として活動中に治安維持法によって検挙され、豊多摩刑務所に収監された。出所後はプロレタリア美術運動から離れ、1934年〔1933年?〕織田一磨らと武蔵野雑草会をおこす。その後体調を崩すが1937年健康を取り戻して創作版画の制作を始めた。1938年11月に吉祥寺の版画グループ「朴の会」が発行した版画集、『むさしの風景』其の一（非賣会員本、限定20部）に多色木版画《砂利採取場（多摩川畔）》を寄せた。1939年10月に病気が再発、1940（昭和15）年5月4日に逝去。1941年5月、一周忌に『三角泰遺作集』（三角正子編）刊行される。【文献】『三角泰遺作集』（三角正子編 1941）／『近代日本彫刻集成 第三巻 昭和前期編』（国書刊行会 2013）（滝沢）

水本 清（みずもと・きよし）

1931（昭和6）年当時、大阪在住の銅版画家・高羽敏が中心になって開催された西田武雄を囲む「エッチャーの小集」の会（1941.3.27 於大阪「寿司恵」）に、中井平三郎（京都）・武藤真（大分）・今井退蔵（神戸）・横山信也（神戸）・西村貞（大阪）らとともに参加しているが、参加の経緯は不明で、作品も未見。【文献】『エッチング』100・104／武藤隼人『高羽敏「満州風景第一輯哈爾濱点描」-制作年1937をめぐって-』（私家版冊子 2015.6）（樋口）

三田秋作（みた・しゅうさく）

小林澄心・百瀬渥と三田の3人で版画同人誌『ÛA!』（1929 10冊）、版画同人誌『版画狂』（1930）を発行する。小林澄心と百瀬渥は東京美術学校図画師範科出身であるが、三田の経歴は不明。2人との関係もはっきりしない。『ÛA!』が発行された1929年は、小林は正則中学校、百瀬は牛込区津久土小学校に勤務していた時期で、三田の動向は不明であるものの3人が東京にいたと考えるべきだろう。『ÛA!』第1巻1号（1929.1）には《松の樹》と表紙、第1巻2号（1929.2）に《裸婦》、第1巻3号（1929.3）に《童話》、第1巻4号（1929.4）に《聖堂付近》と表紙、第1巻5号（1929.5）に《花》《彼ノ女》、第1巻6号（1929.6）に《天文台》《EX-LIBRIS》を発表。第1巻7号（1929）は表紙や目次がないため確定できないが、第1巻8号（1929.8）に《流れ》、第1巻9号（1929.12.1）に《屋上美容院》と表紙、第1巻10号（1929.12.22）には《ラフノズ》と表紙を発表している。その翌年には『ÛA!』の継続誌と思われる『版画狂』にも作品を発表する。本誌は毎号タイトルの表記が異なり、『版画狂』の表紙には巻号がなく、確認はできていない。『版画鏡』第2巻2号（1930.9.14）、『版画経』第2巻3号（1930.10.17）、『版画京』第2巻4号（刊行年月不明）は表紙となる袋に版画が入っている状態である。各号に目次がないために版画の作者やタイトルも不明である。三田の作品と確定できたものは、裏に付箋が貼ってあり、タイトル・制作年月日の記載がある《赤イ魚》（1930.9.2）は『版画鏡』第2巻2号（1930.9.14）で、《風》（1930.10.17）は『版画経』第2巻3号（1930.10.17）で発表された可能性があり、付箋のみの《潮》（1931.1.11）（作品を特定できず）は次号発表の予定だったとも考えられる。このほか「秋作」とサインがある《聖林風俗鑑 上、下》やタイトル不明の木版画も確認されている。サインは「秋作」「Susak」「m」「am」が使われている。『ÛA!』や『版画狂』は版画同人誌としては大判であり、『ÛA!』の表紙は3人がそれぞれ担当し、三田の表紙には『マヴォ』（1924～1925 全7号）の影響を見ることができるとは、版画作品にはその影響は窺えない。また、目次や奥付は三田のデザインが多く使われているところから、発行の中心となっていたのは三田ではないかとも推測される。【文献】『ÛA!』1-1～1-10／『版画狂』（毎号タイトル表記が異なる）2-1～2-4／『版画堂目録』119（2018.3）（加治）

三田村卷二（みたむら・まきじ）

日本エッチング研究所の西田武雄はエッチング普及のため、毎年夏休みに全国の小・中学校を回り、教師や生徒への版画講習会を開催した。1938年の夏は北海道や青森・北陸などを回り、8月12・13日は岐阜市の岐阜中学校でエッチング講習会（講師：西田武雄・武藤完一・小野忠重 参加者30名）を開催。当時、稲葉郡加納第二小学校に勤務していた三田村も講習会に参加し、その時の郷土長良川を描いた銅版画が『エッチング』第70号（1938.8）に掲載されている。また講習会の感想を「エッチング受講感想記」と題して、会場風景の写真共に『エッチング』第71号（1938.9）に寄稿しており、同号には講習会2日目の紙を使って制作したペーパードライブポイントの作品が掲載されている。【文献】小野忠重「北方記行」『エッチング』70（1938.8）／『エッチング』71（加治）

光岡 始（みつおか・はじめ）

1929（昭和4）年の第9回日本創作版画協会展に木版画

《駿河台風景》を出品。『美の國』第5巻第3号(1929.3)に作品図版と作品評が掲載され、平塚運一は「光岡始氏のスツキリした『駿河台風景』は佳作である」(「創作版画協会展評」と評している。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『美の國』5-3(1929.3)(三木)

満川元行(みつかわ・もとゆき) 1916～2000

1916(大正5)年2月4日栃木県芳賀郡真岡(現・真岡市)に生まれる。1926年に鹿沼に転居。小さい頃より絵を描くの好きで、小学生の頃からすでに版画制作を試みしていた。1928年栃木県都賀郡鹿沼小学校を卒業後、川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・宇都宮中学校)に入学。中学3年生の時の図画の授業で、教師大倉植三郎の勧めで、同校生徒が川上先生の版画欲しさから発行していた版画同人誌『刀』(1928～1932全13輯)に参加。通巻第8輯(1930)に《風景》を初めて発表し、第9輯(1930)に《日本橋風景》、第10輯(1931)に《無題》、第11輯(1931)に《鉄橋》、第12輯(1931)に《鳥》、第13輯(1932)に《風景》を発表する。同校を1933年に卒業。その後は版画制作から遠ざかる。大倉先生には美術学校の進学を勧められたが、静岡高等学校理科乙類に進学し、1936年に卒業。1937年に東京帝国大学医学部に入局し、1941年に卒業後、東京帝国大学医学部小児科学教室に入局。同付属病院に勤務。1942年に召集され、1943年には軍医として南洋の戦地に応召。1946年2月に復員し、10月東京帝国大学医学部小児科学教室に復帰。その後、厚生技官に任ぜられるが、1950年に辞任し、札幌市立札幌病院小児科医長となる。1951年東京大学より医学博士の学位を授けられ、1952年には北海道大学小児科学教室に入局。その後、同愛記念病院小児科医長を経て、1969年東京渋谷区に満川クリニックを開設。その後、日本小児アレルギー学会名誉会員、日本小児学会名誉会員となる。2000(平成12)年9月14日逝去。自著に『戦誌塩：東部ニューギニア戦線・ある隊付軍医の回想』(戦誌刊行会 1984)、『発育論から感作病論へ：私の研究軌跡・論文集』(満川元行 1992)がある。【文献】『版画をつづる夢 宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡』展図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

満谷国四郎(みつたに・くにしろう) 1874～1936

1874(明治7)年10月11日岡山県賀陽郡門田村(現・総社市)に生まれる。岡山中学時代に松原三五郎に画才を認められ、3年で中退し、徳永仁臣を頼って上京。1891年五姓田芳柳に入門、翌年小山正太郎の不同舎に入り、洋画を学ぶ。1898年明治美術会創立十周年記念展に《林大尉の死》と《妙義山真景》を出品、《林大尉の死》は宮内省買上げ、《妙義山真景》は外務省買上げとなる。1899年には《尾道港》を出品。1900年パリ万国博覧会に《蓮池》の出品を契機に、鹿子木孟郎らとアメリカ経由でフランスに留学し、ジャン・ポール・ローランズに学び、1901年帰国。1902年には大下藤次郎・吉田博らと太平洋画会を創立し、翌年の第二回展には《楽しきたそがれ》他20点の作品を展示する。1907年文展第1回展に《購夢》を出品、以後文展審査員となる。同年の東京勧業博覧会に《かりそめのなやみ》を出品し1等受賞。この頃、太平洋画会の仲間たちと共に諸雑誌のクロモ石版の口絵図版を

盛んに描いている。中でも縁戚関係にあった薄田泣菫の『ゆく春』(1901 コロタイプ色刷)、『白玉姫』(1905 多色木版、伊上凡骨か)、『白羊宮』(1908)等(いずれも金尾文淵堂刊行)や小林愛雄『管弦』(彩雲閣 1907)の挿画も手がけている。自筆の文章は少ないが『絵画独習書』(東京国民書院 1909)に「芸術界に於ける予が経歴」を語っている。1911年大原孫三郎の援助で2度目のパリ留学を果たし、1913年に帰国するが、後期印象派の影響を受け、画風が一変し、裸婦と風景に独自の境地を描き出す。1925年には帝国美術院会員となり、《緋毛氈》(第13回帝展 1932)など華やかな画歴を展開する。1936(昭和11)年7月12日東京で逝去。没後の同年11月、太平洋画会内に設けられた「日本新版画協会」(石川寅治・吉田博ら10作家)より刊行の『新時代版画集 後輯』に多色木版画《裸女》が入輯している。【文献】『日本美術年鑑 昭和12年版』(美術研究所 1937) / 石井柏亭『画人東西』(大雅堂 1943) / 『日本の版画IV 1931-1940』展図録(千葉市美術館 2004)(森)

三塚忠男(みつづか・ただお)

1934年、川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)を卒業。在学中、川上先生の版画欲しさから同校生徒が発行していた版画誌『刀』(1928～1932全13号)の最終号となった第13輯(1932)に《草の実》を発表する。【文献】『版画をつづる夢 宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡』展図録(宇都宮美術館 2000) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

三塚文三(みつづか・ぶんぞう) 生年不明～1937

東京に生まれる。東京高等工芸学校(現・千葉大学工学部)在学中、印刷工芸科刀画同人誌『刀画』に参加。第2号(1935.10)に《秋》を発表する。1937年3月同校を卒業。1937(昭和12)年10月1日逝去。【文献】『東京高等工芸学校一覽』昭和14年版(東京高等工芸学校 1940) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

三俣右一(みつまた・ういち)

日本創作版画協会の版画家たちが作品を寄せた版画同人誌『詩と版画』(1922～1925全13号)の第7輯(1924.9)に《道》、第8輯(1924.11)に《新桐生風景》を発表。三俣は濱中林太郎や松浦喜久二らを同人とする「蒼空版画会」(桐生市新宿 濱中林太郎方)に所属。なお、同会は1922年5月頃に版画同人誌『蒼空』第1号(蒼空版画社)を創刊。同人の木版画10点が掲載されていると『みづゑ』(208 1922.6)の「新刊紹介」は伝えているが未見。【参考文献】「新刊紹介」『みづゑ』208(1922.6) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

南 薫造(みなみ・くんぞう) 1883～1950

1883(明治16)年7月21日広島県賀茂郡内海町(現・呉市安浦町)に生まれる。医者の子に生まれ跡継ぎと期待されるも絵を志し、1902年東京美術学校西洋画科に入学。岡田三郎助の教室で学ぶ。1905年白馬会創立10周年記念展で初入選。1907年美校を卒業し、イギリスに留学。パリでも学び、アメリカを経て1910年に帰国。同年7月「白樺社主催南薫造、有島壬生馬滯欧紀念絵画展覧会」を上野の竹の台にて開催、白樺主催展の記念すべき初回となった。同じ年の第4回文展で《坐せる女》が3等賞、さらに翌年の第5回展で《瓦焼き》が最高賞2等

賞を、翌々年の第6回展でも《六月の日》が同賞を獲得し、画壇における地位を確立する。以後も文展で受賞を重ね、1916年には33歳にして文展の審査員となった。瀬戸内の風土に取材した温雅な風景画を得意とし、水彩画の巧手としても名をなす。官展と光風会展を中心に活躍を続け、1932年東京美術学校教授、1937年帝國芸術院会員、1944年皇室技芸員。戦中は郷里に疎開、再び上京しないまま、1950(昭和25)年1月6日広島県賀茂郡安浦町にて逝去。

イギリス留学を終えてしばらくの間、自刻自摺の木版画を手がけたことが知られる。美校時代から交流があり、イギリスでも親しんだ富本憲吉とともに東京淀橋町柏木の寓居で着手し、1916年の末頃まで制作が続いたと考えられる。富本から南に宛てた1911年の書簡の多くには木版画への熱中ぶりが語られ、ふたりがその熱を共有していた様子が伝わる。南は留学時代、日本の木版画に啓発された外国人の仕事から刺激を受けたといい、短期間ながら、主として瀬戸内の風景を描いた素朴でみずみずしい十数点を残した。暮らしを自らの美意識で統一しようとするなかで木版画を発想・展開した富本とは異なり、あくまでも絵画表現の一手段ではあったが、南もこの時期は油絵や水彩だけでなく図案やカット、装幀など生涯で最も幅広い制作をしており、そのひとつが木版画であった。専門の道具をあえて揃えずに手がけられた荒削りで清新な造形は早くから注目され、やはり留学期に親交があった高村光太郎の画廊琅玕洞で1911年3月から販売されている(琅玕洞の台帳にはタイトルとして「すまり星」「舟おろし」「瀬戸内(其一)」「野」「瀬戸内(其二)」「瀬戸内海(大)」「瀬戸海」が残る)。また同年4月に富本とバーナード・リーチが中心となって吾楽で開催した「美術新報主催新進作家小品展覧会」にも出品され、さらに雑誌にも掲載されて《魚見》(伊上凡骨彫)が『美術新報』第11巻第3号(1912.1)を、《浦の漁灯》が『現代の洋画』第11号(1913.2)を、《風景》が同第23号(1914.2)をそれぞれ飾った。これらは創作版画が街頭や誌上で紹介されたきわめて早い例といえ、影響力も目ざましいものがあつた。たとえば前川千帆や平塚運一は木版に着手する頃の影響源として南の作品をあげ、恩地孝四郎も「僕は初め「方寸」はよく知らなかった。(中略)その刺激となったのは「方寸」より「白樺」であり、山本より、南、富本であった」との言葉を残している(『過去搜索』『エッチング』86 1939.12)。創作版画の最初期において、南の仕事は、富本のそれとともに、山本鼎らの動きとは別の流れとして非常に重要だったといえるだろう。日本版画協会は後年、1939年の第8回展で両名に敬意を表して「特別陳列 版画発達史的展観第二 南薫造・富本憲吉版画作品」を開催、南の木版画8点を展示している。なお、取材地や関連作品・資料などに言及した最新の研究として、藤崎 綾「資料紹介：1910年代前半の南薫造—1912～15年の日記と版画制作」がある。【文献】南薫造「不知不識新形式を生まん」『美術新報』10-12(1911.10)／「新時代の作家(一)南薫造氏」『美術新報』11-3(1912.1)／南薫造「版画に就きて」『大阪朝日新聞』日曜付録「版画展覧会」(1913.11.16)／南薫造「思ひついたまゝ」『アトリエ』5-1(1928.1)／富本憲吉(談)「私の版画」『日本版画協会々報』33(1940.2)／『光太郎資料』10〔琅玕洞文書〕(北川太一編 1962)／『南薫造日記・関連書簡の研究』(岡本隆寛・高木茂登編 1988)／[1908/09 ロンドンの青春：前後：白瀧幾之助・南薫造・富本憲吉とその周辺]展図録(ふくやま美術館 1990)／『南薫

造宛 富本憲吉書簡(大和美術史料 第三集)』(奈良県立美術館 1999)／藤崎 綾「資料紹介：1910年代前半の南薫造—1912～15年の日記と版画制作」『広島県立美術館研究紀要』14(2011.3)(西山)

南見専一(みなみ・せんいち)

1942(昭和17)年の第6回造型版画展に木版画《歴史》《資源》を出品。【文献】『造型版画協会第六回展覧会作品目録』(1942)(三木)

南 素行(みなみ・もとゆき)

北海道に生まれる。旧姓は小坂留太郎。号は素行。1910年(明治43)年東京美術学校図画師範科に入学。在学中の1913年、第2回光風会展に油彩画が入選。同年図画師範科を卒業した。翌1914年の第1回二科展にも油彩画が入選。1915年には同校師範科研究生として入学している。その後、時期は不明だが南姓となり、展覧会などは「南素行」の名で発表。1922年に京都の図画教育者の有志で結成された「京都図画教育家協会」(1924「紫明会」と改称)に参加。1922年と1924年の会員作品展にも出品したようである。なお、参加時は平安中学校に勤務か。また、1936年頃は平安中学校と京都女子高等専門学校に在職している。版画は、1929年に開かれた第1回京都創作版画会展(2.1～5 京都・大丸)に木版画《風景》を出品しているが、その他の活動は不明。油彩画は、1934年の大札記念京都美術館美術展と第15回帝展に出品したほか、昭和十一年文展鑑査展(1936)、第2回新文展(1938)、第3回新文展(1939)、第2～6回京都市展(1937～1941)などにも出品。また、1928年に大阪で結成された「関西パステル同好会」(天羽義安ら)などでパステル画の指導も行っている。【文献】『日本美術年鑑 昭和十一年版』(美術日報社 1936)／岡田 毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府総合資料館紀要』12(1984)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』(ぎょうせい 1992)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『関西パステル』(関西パステル同好会 1939.8)(三木)

南沢達善(みなみさわ・たつよし)

長野県下水内郡の小学校教師の集まりであった下水内郡手工研究会は、版画同人誌『葵』(1934～1938 5号)を発行する。その第1号(1934.9)に《柿》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

南屋音彦(みなみや・おとひこ) 1910～2000

1910(明治43)年3月10日香川県三豊郡豊浜町に生まれる。本名は合田好道(よしみち)。兄は合田岬一(正隆 1908～1975)。1916年両親と朝鮮慶尚北道に移住するも、1919年兄と帰郷、祖母と暮す。1925年県立三豊中学校を3年で中退、別府に移る。1929年画家を志し、上京。同年の第7回春陽会展に「南屋音彦」の名で木版画《果樹園》が初入選。その後、春陽会洋画研究所(1929.9設立)に入り、3年ほど学ぶ。また同じ頃、料治熊太を知り、料治が計画していた版画誌『白と黒』の編集同人となり、1930年2月の創刊号に木版画《少女像》《暖日》を発表。その後も第21号(1932.2)まで、毎号に作品を発表した。同年、第2回童土社絵画展(10.11～13 静岡・田中襦衣店)に料治らと招かれ、木版画《少女》《暖日》《お茶の

水」など8点を出品。翌1931年には第1回新興版画会展(6.21～25 新宿・三越、大分展:8.5～6 大分・丸吉)に《駒沢風景》(拓墨摺)が入選。また、童土社の版画誌『ゆうかり』第5・6号(合輯号 1931.12)に木版画《風景》を発表した。1932年からは洋画の発表が中心になり、同年の第10回春陽会展に油彩画を出品。その後も第11・15回展(1933・1937)に入選した。もっとも、料治との関係は切れたわけではなく、『版藝術』(白と黒社)の第9号(1932.12)と第58号(終刊号 1936.12)に木版年賀状、南屋作品による特集号である第56号「福島宮城郷土玩具集」(1936.11)に表紙・裏表紙も含め木版画22点、『版画蔵票』(白と黒社)の第1～10号(1937～1938?)にも木版蔵票の蔵書票を発表している。1939年には、兄が部長を務めていた京城の丁字屋百貨店宣伝部に勤務。ついで美術部に移る。また、第17回春陽会展(1939)に入選した。1942年京城を引き上げ、東京で伊東安兵衛と喫茶をかねた工芸店「門」を開業。この年から展覧会発表は本名の「合田好道」の名を使い、第20回春陽会展と第5回新文展に入選。翌1943年は第18回国画会展に出品し、国画奨励賞を受賞。会友に推挙され、第19回展(1944)にも出品した。戦後は、1946年に濱田庄司を頼り、益子に移住。翌1947年頃から作陶を始め、後に円道寺成井窯などで絵付けの仕事に就き、作陶と画業を続けた。1960年には油絵専念のため東京へ移るも、1964年には再び益子に戻っている。1972年頃から韓国での築窯を計画。1974年韓国へ移住し、金海窯を築窯した。1980年益子へ帰り、翌1981年合田陶器研究所を設立。作陶に励み、1995年栃木県文化功労賞を受賞。1999年には地域文化功労者文部大臣表彰を受けた。2000(平成12)年2月6日栃木県益子で逝去。【文献】横堀聡編『合田好道年譜』『合田好道展』図録(陶芸メッセ・益子 2002)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／『第二回童土社絵画展覧会』目録(1930)／『第一回新興版画会出品目録』(1931)／『創作版画誌の系譜』(三木)

峯 親吉(みね・しんきち)

京都に生まれる。本名は峰新吉か。のち「孝至」と改名。1926(大正15)年京都高等工芸学校図案科を卒業。1929年の第9回日本創作版画協会展に「峯親吉」の名で木版画《ピノチヨ》《チュリップ》を出品。平塚運一は、「峯親吉氏の二点もスツキリした技法と一種の情味を持つてゐる」(『創作版画協会展評』『美の國』5-3)と評している。翌1930年には母校図案科の卒業生有志で結成された「草芽会」に参加。1933・34・35・37・40年に開かれた「草芽会工芸展」(銀座・資生堂)に出品した。「峯孝至」の名も使ったようである。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『美の國』5-3／『資生堂ギャラリー七十五年史 一九一九～一九九四』(求龍堂1995)／『京都高等工芸学校一覽 自昭和十六年 至昭和十七年』(1941)(三木)

峰岸三郎(みねぎし・さぶろう) 1913～1999

1913(大正2)年宇都宮市大工町に生まれる。1926年宇都宮尋常小学校東校を卒業後、川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校(現・県立宇都宮高等学校)に入学。在学中は美術サークル「パレット会」に所属し、油彩画や水彩画を制作する。1928年に長谷川勝四郎ら同校生徒の版画好きが集まって版画同人誌『刀』(1928～

1932 全13輯)を創刊する。峰岸も参加し、1931年に同校を卒業するまで作品の発表を続ける。同誌第1輯(1928)に《顔》、第2輯(1928)に《松島五大堂》、第3輯(1928)に《或日ノ東京》、第4輯(1929)に《田家ノ朝》、第5輯(1929)に《花》、第6輯(1929)に《点景》、第7輯(1930)に《電話器》、第8輯(1930)に《駒ヶ岳》、第9輯(1930)に《神宮絵画館》を発表する。1931年春に同校を卒業。その後も絵画制作を続けていたが、1937年の父親死去に伴い、若くして家業に専念。ようやく1993年になって絵画制作を再開した。1999(平成11)年に逝去。なお、「峯岸」との表記もあり。【文献】『版画をつづる夢 宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡』展図録(宇都宮美術館 2000)／『創作版画誌の系譜』(加治)

峰島尚志(みねしま・なおし)

生没年不詳の木版画家。姓は「峯」や「嶋」が使われることもある。1910(明治43)年頃、溜池の白馬会洋画研究所と生巧館のメンバーが編集・発行した版画同人誌『白刀』準備号1に石版画《大東》を発表。1913年11月、行樹社第2回展に参加。経緯は不詳ながら大正初期に澎湃とした版画趣味の中心にいたことは確かで、1913年11月16日の『大阪朝日新聞』の日曜附録「版画展覧会」に「木版画の味」を寄稿、自刻作品《ダリヤの花》が掲載されている。「木版画の味」では彫師の手を経たものは「自分の絵では無い」とし、「深い版画」を得るため下絵無しに「ヂカに」彫り、「小刀の尖から版を製作」したいと述べている。また『現代の洋画』第20号(1913.11)や『美術週報』第1巻第8号(1913.11)の記事によれば同年10月に岡本帰一とともに東京三越で第1回版画展覧会を開催、ふたりで50余点を展示したといい、これは創作版画展の貴重な魁と考えられている。また1914年3月に開会した東京大正博覧会の「彫版印刷」の部に《酒甕》を出品、18点の入選作のうち唯一の創作版画であった。『美術週報』の記事からすると『都新聞』に自画自刻の木版画を連載しており、1915年3月の三越木版画展覧会にも出品したようである。1914年のライブツィヒ博覧会に「自刻自画の木版画を出品」したとの記事もあるが、詳細は不明。1919年の第1回日本創作版画協会展には《北陸の朝》《早春》《初日》を入選させているが、以降の活動については知られていない。【文献】峰島尚志「木版画の味」『大阪朝日新聞』日曜附録「版画展覧会」(1913.11.16)／青木茂「芝築地派と峰島尚志」『町田市立国際版画美術館紀要』3(1999.3)／『東京大正博覧会美術館出品目録(復刻)』(フジミ書房 1999)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『創作版画誌の系譜』(西山)